**まずロータリークラブの2つのモットーは「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」と「超我の奉仕」です。**

**ページ**

1. **まず「最もよく奉仕する者、最も多く報われる」「HE　PROFITS MOST WHO SERVES BEST」について説明します。**

**これはアーサー・フレデリック・シェルドンが1910年の全米ロータリー大会で表明した言葉です。1905年****ポールハリスと数名で発足したロータリークラブの目的や存在理由について疑問を持つ人が現れました。そこでロータリーに新しい理想を考え、それを明確にするために委員会が設置されました。そこで委員長に任命されたのがシェルドンです。シェルドンは悪徳と信用不安が横行し、消費者は自分で自分を守るしかなかった当時にあっても、公明正大に経営している商店や会社が大成功している事実を知って、その理由を探求しました。その結果「職業は社会に奉仕する手段である」と提唱しました。1910年のシカゴ大会の閉会時にシェルドンは 次のように語ります。「19世紀の商習慣の特徴は競争です。出し抜かれる前に出し抜け、ということです。20世紀に入り人類は賢くなりました。20世紀の特徴は協調です。人間は英知の光に照らして正しい行為は報われる。職業は人類の奉仕の科学である。もっともよく奉仕をするもの、最も多く報われる」。以上です。これが現在も続いている職業奉仕の理念です。ちなみにこの時期にこのシカゴで暗躍していたのがアル・カポネです。それだけでもこの時代の世相が理解できます。**

**ページ**

1. **次に超我の奉仕について説明します。**

**ベンジャミン・フランクリン・コリンズはミネアポリスRCの会長であった、1911年ポートランドで行われた全米大会で次のように語りました。自分のクラブで採用し、厳守してきた原則は「SERVICE NOT SELF（無私の精神）」であり、これによってクラブを組織し、新しい会員にもこの精神を学ばせるのが良いと語っています。この標語は参加者の賛同を得ましたが、のちに人はみな自己を尊ばなければいけないし、自己を守らないといけない、それならば自己を否定するNOTより自己を第二におくABOVEのほうがよいのではないかということで「SERVICE　ABOVE　SELF」に修正されました。**

**これら二つの標語が公式の標語になったのは1950年デトロイト国際大会においてです。この二つの標語のうち、「最もよく奉仕する者、最もよく報われる」**

**は職業奉仕の理念を表すものであり、「超我の奉仕」は米山梅吉さんが訳された「サービス第一、自己第二」の心掛けが事業成功の秘訣であることを示すとともに、社会奉仕、国際奉仕の人道的奉仕の理念であると変化してゆきました。**

**ページ**

1. **決議23－34が登場した時代背景**

**1905年職業人の親睦を軸にロータリーが発足しました。**

**1910年代になって、実践を伴わないRCの理念に飽き足らずクラブとして金銭的奉仕や具体的奉仕の実践を積極的に行うべきであるという動きが顕著になってきました。これが実践派と理念派との対立に発展してゆきます。**

**実践派としては身体障害児の保護、教育に貢献してきたエドガー・アレンです。彼は1918年オハイオ州エリリアRCに入会し、RCは一丸となってこの事業に当たるべしと主張し、1922年のロサンゼルス大会に身体障害児救済事業に関する決議案を提出しました。**

**理事会はこの事業を主唱する決議22-17を採択しました。これにより実践派は力を得て「ロータリー創立の理念を守るべき」というシェルドンを中心とする理念派との対立が深まりロータリーは分裂の危機に瀕しました。**

**そこで国際ロータリー理事会は分裂の危機を乗り越えるため1923年セントルイスの国際大会で決議23-34の採択によって論争に終止符が打たれ、両派の対決は解消しました。これは他人のことを思いやり、他人のために尽くそうという奉仕活動の根本原理を明確に定義しています。**

ページ

**結論として決議23-34第1条はロータリーの奉仕理念を確定した唯一のドキュメントとして重要です。読み上げます。「ロータリーは基本的には一つの人生哲学であり、それは利己的な欲求と義務及びこれに伴う他人のために奉仕したいという感情との間に常に存在する矛盾を和らげようとするものである。この哲学は　「超我の奉仕」の哲学であり、「最もよくするもの、最も報われる」という実践理論の原則に基づくものである。」とうたっています。まとめますと、二つのモットーを一つの主張としてとらえると、サービスを自己の利益や都合より優先させよう、利益はサービスの結果である。相手のために最善のサービスをすれば、結果として最大の金銭的な利益と大きな精神的な満足が得られるということです。**

**ページ**

1. **最後に決議23－34第6条では**

**・ロータリーの奉仕活動の実践は個人奉仕が原則であること、クラブが行う奉仕活動は会員の訓練のための例示であると明記されております。これによって奉仕の実践は、個人奉仕か、団体奉仕かという論争に終止符が打たれています。**

**ページ**

1. **奉仕の理想**

**奉仕の理想はロータリーの目的の中にあるIDEAL　OF　SERVICEが直訳されたもので「奉仕と言う理想」という意味です。**

**IDEALとはその完成度・達成度において最高位にランクされる「もの」または「事柄」であります。具体的には人、地域にニーズがあり、そのニーズを満たしていこうとする行為です。そのニーズを知ることが必要で、ニーズが満たされなければSERVEしたことにならない、その人が欲求することと、その人にとって本当に必要なこととは必ずしも一致しない。**

**本当に必要なものを的確に把握することが大切だということですね。**

**結論としてIDEAL　OF　SERVICEとは人のニーズをよくくみ取ってそのニーズを理想的な形で満たすという意味になります。**

**ページ**

1. **職業奉仕には日本の従来の文献が参考になる**

**日本に従来からある商売哲学**

**石田梅岩の石門心学　　　　とひ問答（松下幸之助が愛読したといわれています）**

**二宮尊徳の「報徳思想」**

**近江商人の「三方よし」　　売り手よし、買い手よし、世間よしなどがよ　く知られています**

**渋沢栄一の「論語とそろばん」**

**西洋にあるピューリタンの職業倫理**

**・マックス・ウエーバー**

**プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神**

**ページ**

1. **さらに近江商人の「商売の心得十訓」では特に1番と5番がロータリーの考えに似ています。**
2. **商売は世のため、人のための奉仕にして、利益はその当然の報酬なり**

**5.　無理に売るな、客の好むものも売るな、客のためになるものを売れ**

**が特に関連しています。**

**近江商人といえば映画「天秤の歌」でその理念はよく知られており、伊藤忠商事をはじめ大企業を多数輩出しています。**

**ロータリーの理念は日本の企業経営者の理念と一致しており、ロータリーが日本で受け入れられたと考えられます。**

**ページ**

1. **最後にrotaryの樹についてお話しします。**

**2008年RI国際協議会において渡辺好政RI理事が講演を行い、その際に提示された次のページにありますロータリーの樹・2008が2013年RI規定審議会で採択されました。**

**ページ大事なところなので読み上げます。**

**「1905年、ポールハリスら4名によって創始された最初のロータリークラブは、その歴史が示すように、初めに親睦、助け合いから始まりました。**

**すなわち、ロータリーの樹に水と栄養を送る「根」は「クラブ奉仕」であります。ロータリークラブ会員はロータリーの目的を基本としてハーバート、テーラーによって実証され、ロータリアンの行動規範である「四つのテスト」による奉仕活動の実際を体得することによって「ロータリアン」に進化してまいります。ロータリークラブ会員からロータリアンに進化してゆく過程の基盤には、コリンズの「超我の奉仕」、アーサーシェルドンの「最もよく奉仕する者、最も多く報われる」が存在いたします。私たちはこの２つのモットーを１枚のコインの表・裏と考えながら、日常の奉仕活動に邁進しております。ロータリーは「理想の高唱」に終わるのではなく「行動の哲学」なのであります。」と語っています。**

**ページ**

**最後にロータリーの樹とは基本理念であるTHE　IDEAL　OF　SERVICE（奉仕の理念）を実践する手段が職業奉仕であることをわかりやすくした図であります。**

**クラブ奉仕とは例会出席のことであり、ロータリーの樹に水と栄養を送る「根」であり、職業奉仕とはその上に成長する「幹」であり「奉仕の理想」と並ぶものと位置づけられています。青少年奉仕、社会奉仕、国際奉仕、米山奨学金、ロータリー財団に基づく奉仕は枝が伸びて実った「果実」であると語っています。**

**あらためて申し上げます。例会出席を基本中の基本とするクラブ奉仕なくしてロータリークラブそのものの存在はあり得ません。続いて樹の幹ともいわれる職業奉仕の理念の成長なくして果実ともいうべき奉仕活動、青少年奉仕、社会奉仕、国際奉仕は一切ないといえます。**

**ページ**

**以上2つのモットー、ロータリーの樹についてお話させていただきました。**

**ご清聴ありがとうございました。**